論　文

George Gissing, *The Odd Women* (1893) の「現代性」

——世紀末におけるフェミニズム——

八　幡　雅　彦

"Modernity" of George Gissing's *The Odd Women* (1893) : Feminism at the End of the Century

Masahiko YAHATA

When George Gissing's *The Odd Women* was published in 1893, a literary review gave a comment that it was "intensely modern, actual in theme." This work has begun to draw attention again lately as the improvement of women's status has widely been claimed.

Monica Madden wanted so desperately to escape from her miserable life as a shopgirl at a draper's that she married a wealthy middle-aged man, Edmund Widdowson, though she did not love him at all. He would not allow her any freedom, demanding that she should always be together with him. Monica, who could not put up with the oppressed life, fell in love with another man. After Widdowson discovered her infidelity and offered violence to her, she ran away from his house and died a tragic death giving birth to Widdowson's child.

Meanwhile, Rhoda Nunn, a champion of the feminist movement, abhored any idea of marriage at first. But she was attracted to Everard Barfoot who advocated a "free union" or marriage without a legal union. After their engagement was made, Rhoda suspected that Everard and Monica loved each other. Though it turned out to be false, Rhoda realized that Everard embodied the typical Victorian notion of patriarchy when she was denied any explanation of the fact and quarreled with him. Thus she cancelled the marriage and resumed the feminist movement with her mentor, Mary Barfoot.

Gissing shows an ambivalent attitude towards the feminist movement without presenting either a triumph of feminism or that of patriarchy.

In this paper, the present writer is going to investigate Gissing's view of feminism by tracing the conflicts of feminism and patriarchy mentioned above. It will become clear that feminism of the late 19th century involved almost the same problems as that of the 20th century does. *The Odd Women* is very modern in that it reveals this fact.

はじめに

ジョージ・ギッシングの作品というと，比較的良く知られているのは，*New Grub Street*,『新三文文士街』(1891) と *The Private Papers of Henry Ryecroft*,『ヘンリー・ライクロフトの私記』(1902) のふたつのみである。しかし，女性の地位向上が盛んに叫ばれるようになった数

年前から，この *The Odd Women*『余った女性たち』(1893) も注目を浴びるようになってきた。アメリカの大学では，この作品が，女性学の授業のテキストブックになっている。[1] 日本でも，1985年の日本英文学会で，「<新しい女>を考える ―― 小説とフェミニズム ――」と題するシンポジウムで，D．H．ローレンス，E．M．フォースター，ヴァージニア・ウルフらの作品とともにこの作品が取り上げられ，1988年には翻訳が相次いで2冊出版された。[2] 筆者は，ギッシングを研究する者として，なぜこの作品が最近になってギッシング研究者以外からも注目を浴びるようになったのかということに興味を覚えた。

この作品が1893年に出版された時，当時のある文芸批評誌は，「テーマが強烈なほど現代的，現実的」[3]と評した。筆者は，この作品の持つ1893年当時における現代性と今日における現代性，すなわち19世紀末におけるフェミニズムと20世紀末におけるフェミニズムの共通の問題点を解明してみたいと考えている。そしてもうひとつ，この作品の粗筋のひとつにフェミニズム運動の闘士ローダ・ナン (Rhoda Nunn) と，俗な言い方をすれば「遊び人」のエヴァラード・バーフット (Everard Barfoot) の恋愛があるが，ある研究者は，ローダのような倫理観を持った女性がエヴァラードのような遊び人に恋をすることは不自然である，それがこの作品の真実性を損ねていると指摘している。この注目に値する指摘についても考察を試みる予定である。

ヴィクトリア朝の女性たちの置かれた境遇

この作品のタイトルである *The Odd Women* の意味は，もともとは「余った女性たち」ということで，ヴィクトリア朝期には，イギリスでは女性の数が男性の数を大幅に上回り，結婚できない，あるいはしない女性が相当数いたということを示唆している。例えば，統計によると，1851年には女性の数が約40万人多く，1871年になると約60万人多くなり，1891年にはさらに増えて約90万人多くなっている。[4] この作品に登場してくる，この意味での主な "the odd women" としては，マドン医師 (Dr. Madden) の6人の娘のうちの上のふたりであるアリス (Alice) とヴァージニア (Virginia)，そしてフェミニズム運動に携わっているメアリー・バーフット (Mary Barfoot) と前述のローダ・ナンが挙げられる。

また当時女性が就くことができた職業というのは非常に限られていて，例えば家政婦(governess) とか，あるいは木綿産業，婦人服仕立て業といった未熟練労働で，低賃金の長時間労働によって搾取されることが多かった。その状況は，キャロル・ダイハウス (Carol Dyhouse) によって端的に述べられている。

> 疑う余地なく，19世紀の間に女性が就くことのできた大部分の職業は未熟練労働で，非常な低賃金で，まったく厄介な条件のもとで行われるものだった。婦人服仕立て業などいくつかの「苦汗労働の」職業は，恐らくは不相応であろう悪評判を得ていた。大部分の産業では，女性は「低賃金で従順な」労働力を代表しており，通常，もし男性が同じ仕事に就けば得ていたであろう半分の，あるいは3分の1の賃金で雇われていた。[5]

この作品の中では，このように搾取される女性の姿は，マドン医師の末娘で，彼の死後，呉服屋に働きに出たモニカ (Monica) のうちに見られる。そしてまた，ジョン・ラスキン (John Ruskin) が「女性は自己発展のためではなく，自己放棄のための教育を受けるべきである。」[6]と述べたように，女性は結婚したら家庭の仕事に専念するのが当然のように考えられ，家庭を守る天使として美化されていた。このことも，やはりダイハウスの次の指摘で明かである。

> 家庭の中に閉じ込められ，依存する女性の理想像は，ジョン・ラスキンやコベントリー・パットモア (Coventry Patmore) の著作のうちに簡潔に表現されている。彼らは，家庭を聖なる場所，清らかで天使のような妻が取り仕

切っている精神の安息所と見なしていた。[7]

この作品のうちでは，マドン医師と，モニカと結婚するエドマンド・ウィドウソン（Edmund Widdowson)が，この女性観の代表的持ち主である。

The Odd Women には，以上述べたような，ヴィクトリア朝の女性たちの置かれた境遇が刻明に描かれている。

ウィドウソンの男性優位観とモニカの抵抗

アリス，ヴァージニア，モニカの3姉妹の父親は,「世の中のことは男性に取り組ませておけばよい。……もし仮に娘たちが金のことで悩まねばならないと私が思うようなことがあれば，私は実に悲しいよ。」[8]という彼の言葉が示すように，ジョン・ラスキン同様，女性は家庭の外に出るべきではない，世俗的なことはすべて男性に任せておけばいいというヴィクトリア朝の典型的な倫理観，女性観を持った人物で，娘たちをいっさい外で働かせなかった。医者である彼は，急病人の往診に行って，その帰り道で馬車から振り落とされて不慮の死を遂げる。かくして3姉妹は働きに出なければならなくなり，長女のアリスは家政婦，次女のヴァージニアはある婦人の付添いとして働き，末っ子のモニカは呉服屋に勤めるが，ここで彼女は低賃金の長時間労働によって搾取される。そんなモニカの目の前に現れたのが，多額の遺産相続金を手に入れ，働く必要もなく悠々自適の生活を送っている中年男性エドマンド・ウィドウソンであった。彼はモニカに結婚を申し込む。彼女は彼をちっとも愛さないが，とにかく苦しい生活から逃れたいという一心で彼との結婚を決意する。しかし悲劇がモニカを待ち受けている。ウィドウソンはモニカの父親以上に男性優位観が浸透した人物で，彼女の個人的自由をいっさい奪って，家庭の中に閉じ込めようとする。平日は，朝家事をやった後，午後は彼と一緒に散歩かドライブ，夜は読書という日課，日曜日は1時に昼食，6時にお茶という日課で，ウィドウソンはこれが寸分でも狂うことを嫌った。彼の男性優位観は次のモニカへの語りかけの内に顕著に見られる。

「女性の領域は家庭なんだよ、モニカ。不幸なことにも、女の子たちは外に出て自分たちの生活費を稼がなくてはならない場合が多いけれども、それは不自然なことだ。文明が進化すれば完全になくなる必要性だ。……教育を受けた女性は男性の生き方をまねたりするよりも家庭の奉仕者たるべきだと私は心から信じている。」[9]

モニカは当然のごとく自由を主張する。もっと人間らしい生活を送りたいと主張する。しかしウィドウソンはそれをいっさい聞き入れようとせず，モニカはフラストレーションでとうとう体を壊してしまう。それでもウィドウソンはかたくなにモニカに自由を与えようとせず，彼女が女友だちの家へひとりで遊びに行くことさえ禁じる。結局はその家にふたりで行くということで話は落ち着くが，その家でモニカはベビス(Bevis)という男性と知合い，お互い相思相愛の仲になってしまう。そして夫の目を欺いて，彼の元に頻繁に通うようになり，彼に駈落ちをそそのかすが，いざとなるとベビスはしりごみして，この不倫の恋は実らない。一方，モニカの挙動に不信を抱いていたウィドウソンは私立探偵を雇って，彼女の行動に探りを入れる。ウィドウソンは，彼女がベビスではなくエヴァラードと浮気をしているという誤った報告を受けるが，とにかくモニカは浮気をして自分には嘘をついているということで彼女に暴力をふるう。とうとう耐えられなくなったモニカは彼の家を飛び出し，自分はもう死ぬんだというせんもう状態に苦しむようになり，体は蝕まれてゆき，ウィドウソンの子供を産み落として，この世を去る。

デイヴィッド・グリルズ（David Grylls）が述べているように，ウィドウソンはひ弱な独裁者であり，モニカから見ても，われわれ読者から見ても，不快なばかりでなく哀れな人物である。

しかし同時にグリルズは次のような指摘をしている。

ギッシングは，男の圧制を鋭く解剖しているけれども，ウィドウソンを完全に非難しているわけではない。ウィドウソンのうちには，やはりギッシングがよく理解できる部分がかなり多い。それは，彼の嫉妬，孤独，気の弱さ，妻の服従を望む気持ち，愛の理想化などである。[10)]

特に,「妻の服従を望む気持ち」というのは，2度の結婚に失敗したギッシング自身が切望していたものではなかっただろうか。1879年，彼は売春婦ネル・ハリソン（Nell Harrison）と結婚して，1883年に別れ，この *The Odd Women* を出版する2年前の1891年には労働者階級出身のエディス・アンダーウッド（Edith Underwood）と結婚するが，やはり1897年には法的手続きを踏まぬままに彼女と別れている。モニカを自分の意のままに御すことができなくて,「結婚はどんなに簡単なものだといつも思っていたことか，それが実際にはどんなに簡単どころではないと分かったことか！」[11)]というウィドウソンの心の中での叫びは，ギッシング自身の苦悩を代弁しているような気さえするのである。

さらに，ディアドレ・ディビッド（Deirdre David）もまた「ウィドウソンの惨めさはギッシングも十分理解しているので，彼をフェミニスト小説の男の悪役のうちにきちんとはめ込むことは不可能である。」[12)]と指摘しているように，ギッシング自身の姿がある程度見られるウィドウソンには同情の余地がある。

そしてまた，女性読者から見れば，妻に絶対的服従を強いるウィドウソンはひょっとしたら女々しい，哀れな，か弱い，嫌悪すべきだけの人物かもしれないが，男性読者からすれば，ウィドウソンの妻の服従を望む気持ちにはある程度の共感を覚える部分があるのではないだろうか。

ギッシングの作品の中には，*A Life's Morning*『人生の朝』(1888) のうちでヒロインのエミリー・フッド（Emily Food）の父親を死に追いやるリチャード・ダグワージー（Richard Dagworthy）のような完全な男性悪役も登場してくるが，ウィドウソンは彼らと違って同情の余地ある悪役でなのである。

ローダ・ナンとエヴァラード・バーフットの対立

一方，フェミニズム運動の闘士であるローダ・ナンはメアリー・バーフットの経営する学校で，彼女の助手として，若い女性たちの職業教育に携わっている。メアリーは穏健派であるのに対して，ローダは急進派のフェミニストである。ギッシングの作品には，*Thyrza*『サーザ』(1887)のうちのオーモンド夫人(Mrs.Ormonde)，前述の *A Life's Morning* のうちのバクセンデイル夫人(Mrs. Baxendale)のように，穏健で，堅実で，客観的な立場から物事を判断し，好ましい人物として描かれている女性が幾人か登場してくる。この作品ではメアリーがそういう人物として描かれていることは次の描写で明かである。

彼女だったら，大きな，面倒な仕事をこなすことができただろう。重役の地位に就くことができただろう。市政，いや恐らくは国政でも活動的な役割を果たすことができただろう。そして，この知的特質は数多くの非常に女性らしい性格的特色と相両立していたために，彼女をもっとも良く知る人々は，彼女のことを賞賛ばかりでなく思いやりの気持ちを持って眺めていた。彼女は，「運動」のリーダーとして知られることを望んではいなかった。しかし，彼女の静かな活動は，女性解放を宣伝する女性たちの公的活動よりも恐らくは効果的であっただろう。[13)]

しかし，オーモンド夫人にしろ，バクセンデイル夫人にしろ，メアリーにしろ，ただ単に好ましい人物として描かれているだけではなく，他の登場人物の人生を大きく左右する役割を作品の中で果たしている。メアリーの場合は，彼

女が，エヴァラードと結婚を約束したローダに宛てた１通の手紙がローダの人生を変えてしまうのだが，そのことについては後に触れることにする。

メアリーの穏健的フェミニズムとローダの急進的フェミニズムの対比の例は，かつてメアリーの学校に通っていて，妻子ある男性の愛人になるが，結局は彼から捨てられたベラ・ロイストン（Bella Royston）という娘から救いを求める手紙がメアリーの元へ来た時のふたりの対応の違いのうちに見られる。メアリーは彼女をもう１度引き取って再教育したいというが，ローダはそんなことをしたらあなたの学校は浮浪者の避難所になると言ってメアリーを次のようにとがめる。

> あなたの目的は，世の中に出て何かの役に立つ見込みのある娘たちの援助をすることでしょう。このロイストン嬢は，何の役にも立たない並の人間の最たるものです。いえ，並以下ですわ。そんな人間から何か利益が生まれるとお思いになる程あなたは盲目ですの。もしあなたが彼女を路頭から救い出したいのでしたら，あらゆる手段を尽くしてそうなさって下さい。しかし彼女をあなたの選ばれた生徒たちの中に加えたりしたら，あなたの活動すべてが危うくなりますわ。このような質の娘がここに来たということをいったん知らせたら，―― どうせ知られることになるでしょう ―― あなたの役目はもうおしまいですわ。１年後には学校を完全にやめるか，浮浪者の避難所にするかの選択を迫られることになるでしょうよ。[14]

さらにこのふたりの対照は，結婚観の違いのうちに見られる。メアリーは，ただ養ってもらうことだけが目的で女性は結婚すべきではない，しかし女性たちの多くは結婚しなければすさんだ人生を送ることになるだろうと言って，必ずしも結婚を否定しているわけではない。それに対してローダは，「私は，大部分の結婚はどんな観点からしても忌まわしいものだと確信しています。しかし，女性たちがその忌まわしさをきちんと確信して結婚に反対しなければ，発展はありません。」[15]と言って，結婚を全面的に否定する。

そんな急進的フェミニズム思想を持つローダの目の前に現れた男性が，メアリーのいとこに当たるエヴァラード・バーフットで，巨額の遺産相続金を手に入れて，働かなくても食っていける身分の彼はエジプト，トルコ，日本など世界中を漫遊してイギリスに帰って来たばかりだった。その彼とローダが相思相愛の仲になるわけだが，ロバート・L・セリグ（Robert L. Selig）は，ローダのような労働倫理を持った女性がエヴァラードのような遊び暮らす喜びのためだけに生きている自己中心的な男性に恋するのは不自然である，それをギッシングは読者に納得させることに失敗している，そしてそれがこの作品の真実味を損ねていると指摘している。この注目に値する指摘について，ローダとエヴァラードの恋愛とその破局に至るまでの軌跡を辿ることにより考察してみたい。

エヴァラードは，ローダが男性と対等に堂々と自分の意見を述べるのに引き付けられ，ローダはエヴァラードの結婚観，つまり妻が夫に服従するのではなくて，夫と妻双方に対等の自由があるべきだという結婚観に引き付けられてゆく。例えば，エヴァラードはローダに次のように述べる。

> ぼく自身の結婚に関する理想のうちには，夫婦双方の完全な自由ということがあります。……完全な自由は，知的社会の良識によって認められるもので，人間の心のうちにある悪の大部分を滅ぼすことでしょう。しかし女性の方がまず最初に洗練されねばなりません。その点ではあなたは申し分なしです。[17]

「夫婦双方の完全な自由」というのは，要するに法的結婚に頼らない結び付き，婚姻届を出さずに一緒に暮らすことで，“free union” という表現がなされている。ローダは，結婚を忌み嫌っていたはずなのに，エヴァラードにますます

魅せられていき，彼の女性遍歴の悪い噂ゆえにさらに彼に引き付けられてゆく。彼との結婚を意識し始めてからのローダの心の葛藤の描写は真に迫るものがある。彼との結婚を真剣に考えはじめてから，彼女は今度は逆に法的結婚を望むようになる。エヴァラードの女性遍歴を聞いていた彼女は，彼に結婚したら自分だけに忠誠を尽くして欲しいと思うのである。つまり完璧主義者の彼女は法的結婚によってエヴァラードを自分だけのものにしたいと思うのである。しかし，彼女は，もし法的結婚の話を持ち出したらエヴァラードから低く見られ，彼の愛を失うのではないだろうかと悩む。そして彼女は実際にエヴァラードから結婚の申し出を受けた時，フェミニズム運動の闘士としての挫折を恐れてさらに悩む。承諾すれば自分はエヴァラードの目には卑屈に映るだろう，そして自分自身の目にも恥ずべき人間と映るだろうと恐れる。しかし，結局は，エヴァラードは彼女の法的結婚の願いを受け入れて，ふたりは結婚しようということになる。そしてローダは，これで自分はもはや "odd woman" ではなくなる，もはや完全な女性の独立の模範例ではなくなるけれども，これからは結婚における男女の平等を主張しようと決意する。

確かにローダのような女性の地位向上のために日夜努力している女性がエヴァラードのような遊ぶことを生き甲斐とする男性に恋をするのは一見不自然なことかもしれない。しかし，このローダの心の葛藤の軌跡を読んだ時，それがこの作品の真実味を損ねているとは思わない。むしろ，ローダを完璧なフェミニズム運動の闘士として描くよりも，このように女性らしさを見せて苦悩する姿を描いたことがこの作品の価値を高めていると言えよう。

セリグが,「バーフットが世界旅行の人生のためにわずか29歳という年齢で仕事を辞めたことは著者自身の白日夢を表現している。」[18]と指摘しているように，エヴァラードのうちには，ある程度ギッシングの夢が，金に不自由することなく世界を旅してみたいというギッシング自身の夢が描かれていると言えよう。実際，彼は人生の大部分を貧窮のうちに過ごしながらも，ドイツ，フランス，イタリアなど主としてヨーロッパ諸国を漫遊し，1901年には，*By the Ionian Sea: Notes of a Ramble in Southern Italy*『イオニア海のほとりにて ―― 南イタリア漫遊記 ――』という紀行文を出版している。そしてひとつの場所に定住することなく放浪を続けた彼が46歳の短い生涯を閉じたのはフランスの山村だった。

このようにエヴァラードのうちにはギッシングの姿が一部分見られるということからしても，彼とローダの恋愛が必ずしも作品の価値を損ねているとは思えないのである。

確かにこの作品の価値を損ねている描写や出来事がないわけではない。それは，ジェイコブ・コーグ (Jacob Korg) が,「多くの無意味な出来事と多くの会話があり過ぎる。」[19]と指摘しているように，ミクルスウェイト (Micklethwaite) とファニー (Fanny) の戯画化された結婚物語を初めとして，作品の本筋とは無関係の登場人物や出来事があまりにも多すぎるということである。

ところで，ローダとエヴァラードは結婚を決意したわけだが，まもなくして破局が訪れることになる。エヴァラードは，法に頼らぬ自由な結び付きによる結婚を主張するなど，一見，男女平等思想を持っているようだが，実は彼もまたヴィクトリア朝期特有の男性優位観が浸透した人物であった。例えば，彼がローダとの会話において発した次の言葉はそれを如実に示している。

> ぼくのまわりで見かける女性の大部分は非常に卑しいものですから，軽率にもぼくは不適切な言葉を使ってしまうのです。あなたを男性の立場に置いて下さい。まず，非常に知的で高い教育を受けた男性は百万人そこらはいるでしょう。ところが，それに相当する知性を備えた女性の数は恐らく２，３千でしょう。[20]

そしてまた，最初，彼がローダを妻にしたいと思った理由は，彼女のような強い女性を自分

の足元に膝まづかせることによって自己満足を覚えたいということであった。一方，ローダも，エヴァラードに自分との結婚を承諾させることによって，彼を屈服させた，自分は見事な勝利を収めたというふうに考える。すなわちこのふたりは相手に譲り合って結婚しようという気持ちではなくて，結婚によって相手を征服しようとうという気持ちしか持ち合わせていなかったのである。

破局のきっかけとなったのは，前にも述べたように，メアリーがローダに宛てた１通の手紙だった。日頃からエヴァラードの素行をあまり良く思っておらず，ローダと彼との交際に反対していたメアリーは，ウィドウソンから話を聞いたのだが，エヴァラードとモニカが浮気をしているようだとその手紙の中で述べていた。実際には，モニカの浮気の相手は，先に述べたように，ベビスという男だった。ローダはエヴァラードに釈明を求めるが，彼は拒否する。お互い相手の上に立とうという気持ちしか持っていないため，ああ言えばこう言う，売り言葉に買い言葉で，ふたりは一歩も譲り合おうとしない。結局，後にエヴァラードの疑いは晴れることになるが，彼はローダに「もし君がぼくを愛していたのだったら，ぼくの疑いが晴れた時点で君はぼくに許しをこうていたはずだよ。」と言って，彼女を責める。するとローダは，「あなたが私を愛していたのだったら，あなたは私たちの間に置かれた障害を一刻も早く取り除こうとしたはずだわ。」と言い返す。すると今度はエヴァラードが，「障害を置いたのは君だよ。」と言い返す。このふたりの対立は，典型的なヴィクトリア朝の男性優位観と，当時勢いを増しつつあったフェミニズム思想のぶつかり合いを象徴していると言えよう。結局，ふたりは別れ，エヴァラードは別の女性と結婚し，ローダは独身のままフェミニズム運動を続けようと決意する。

ジョン・スローン（John Sloan）は，ローダ及びこの作品の解釈について次のように述べている。

> ローダを通してギッシングは急進的独立主義のイデオロギー上の欠陥を巧みに提示しているが，同時に歴史上におけるその悲劇的必然性をも明かにしている。この情況において，この作品は女性解放運動に対して敵対的であるか好意的であるかのどちらかだと単純な意味に解釈することは不十分であり，実際間違いである。[22]

彼が指摘するように，この作品は19世紀後半になって盛り上がりを見せてきた女性解放運動を賞賛しているわけでも批判しているわけでもない。この作品の結末を読めば，当時の女性解放運動に対するギッシングの非常に曖昧な姿勢，すなわちそれが今後発展するかどうかはまったく予測できないという姿勢が感じられるのである。

むすび

ディアドレ・ディビッドは，「*The Odd Women* は，社会変化の代償に関する複雑で曖昧な小説である。」[23]と述べているが，これはこの作品の本質を一言で的確に言い当てた指摘である。「社会変化」というのは，イギリスの19世紀後半はフェミニズム運動が盛んになってきて，ローダ・ナンやメアリー・バーフットのように女性の解放，男女の平等を目指して活動を続けている女性たちを呼ぶのに “the New Woman” という言葉が生まれた，そういう変化の時期であることを示唆している。そしてこの作品は，フェミニズムの勝利でもなく，男性優位観の勝利でもなく，非常に曖昧な終わり方をしている。この作品の結末でローダとアリスの会話があり，アリスに仕事がうまくいっているかどうかを尋ねられたローダは，「緑の月桂樹がおい茂るようにうまくいっています。私たちはもっと大きな場所が必要になってくるでしょう。……バーフットさんはいまだかつてないほど健康で活気に満ち溢れています。私もそうです。」[24]と自分たちの仕事の順調ぶりを語る。しかし，この後，ローダはモニカが生み落とした女の赤ちゃんをアリスから預かって抱いた時，

目の前が暗くなり，思わず「かわいそうな子！」と呟く。原文では，“Rhoda's vision grew dim …… 'Poor child!'"[25]と表現されている。これは，表面的には，ローダが，母親のいない，そして父親から見捨てられたこの子供を抱いた時，かわいそうで思わず涙が出てきて目の前がかすんできて，このように呟いたということである。しかし，言外に含まれているもうひとつの意味として，“vision” というのは「展望」ということで，ローダのフェミニズム運動の将来の展望は暗くなったというふうにも解釈できないだろうか。そして，彼女の「かわいそうな子！」という言葉は，モニカの赤ちゃんは女の子だから，この子も将来は男性中心社会の中で苦しまねばならない運命にあるという思いから発せられたのではないか。

このように，ローダのフェミニズム運動は順調に行っているけれども，一方では男性中心社会の中で女性の権利拡張ということも限界があるのではないかと思わせるような結末をギッシングは提示している。そういった意味で，この作品は社会変化の代償に関する複雑で曖昧な小説と言えよう。20世紀末の現代においてもまた20世紀末同様女性の権利拡張ということが叫ばれるようになってきた。そして女性の力が向上するにつれて，物事に容易に妥協できない，例えば結婚に容易に妥協できない女性が増えてきた。そして現代は男性も益々エゴを主張する時代である。従って，ローダ・ナンとエヴァラード・バーフットのような対立は容易に起こる。しかし，いくら女性の力が向上したとはいえ，本当の意味での男女平等は実現し得るのだろうかという懸念が一方では存在する。そのようなことから，19世紀末に書かれたこの作品は20世紀末の現代にも当てはまる部分が随分と多く，今日，注目を浴び始めてきたのではないだろうか。

この作品のタイトル，*The Odd Women* のもともとの意味は，結婚しない，あるいは結婚できない余った女性たちという意味で，ロバート・L・セリグは，この “the odd women” がこの作品を占める割合は半分以下だ，大部分は男女の求愛と結婚の物語である，[26]と述べている。しかし，“odd” という単語には，「風変りな，普通ではない」という意味もあり，ギッシングはこちらの意味も作品中に含めているような気がする。エドマンド・ウィドウソンを結婚相手として選んだモニカ・マドンの生き方，男性中心社会の中にあってそれをくつがえそうと試みるローダ・ナンの生き方を振り返って見た時，彼女たちは「風がわりな，普通ではない」という意味での “the odd women” である。そういった意味で，“the odd women” は作品全体に描かれていると言えよう。

註

1）小池 滋「ギッシング選集によせて」ジョージ・ギッシング著，太田 良子訳『余計者の女たち』(東京：秀文インターナショナル，1988年) ii-iii。

2）上述の太田 良子訳と倉持 三郎，倉持 晴美共訳『余った女たち』(東京：ニューカレントインターナショナル，1988年)。

3）“Unsigned Review, *Athenaem* 27 May 1893, 667, *Gissing: The Critical Heritage*, ed. by Pierre Coustillas and Colin Patridge (London & Boston: Routledge & Kegan Paul, 1972), p. 218.

4）太田 良子「訳者あとがき」,『余計者の女たち』356ページ。

5）Carol Dyhouse, “The role of women: from self-sacrifice to self-awareness, “*The Context of English Literature: The Victorians*, ed. by Laurence Lerner (London: Methuen, 1978) p. 180.

6）John Ruskin, “Of Queens' Gardens,” *Sesame and Lilies* (1865) quoted by Dyhouse, p. 174.

7）Dyhouse, pp. 175-176.

8）George Gissing, *The Odd Women* (1893; rpt. New York: Norton, 1977), p. 1.

9）*Ibid.*, pp. 152-153.

10）David Grylls, “Women, Feminism and Marriage,” *The Paradox of Gissing* (London: Allen & Unwin, 1986), p. 171.

11）*The Odd Women*, p. 239.

12）Deirdre David, “Ideologies of Patriarchy, Feminism, and Fiction in *The Odd Women*,”

Feminist Studies 10, no. 1, Spring 1984, p. 124.

13) *The Odd Women*, p. 54.

14) *Ibid*., pp. 57-58.

15) *Ibid*., p. 104.

16) Robert L. Selig, "Anatomies of Mismarriage,"*George Gissing: Twayne's English Authors Series* (Boston: Twayne, 1983), pp. 73-75.

17) *The Odd Women*, p. 104.

18) Selig, p. 74.

19) Jacob Korg, "The Woman Problem,"*George Gissing: A Critical Biography* (1963; rpt. Washington: University of Washington, 1979), p.190.

20) *The Odd Women*, p. 102.

21) *Ibid*., p. 325.

22) John Sloan, "Oddness and Typicality: *The Odd Women*,"*George Gissing: The Critical Challenge* (London: Macmillan, 1989), p. 123.

23) Deirdre David, p. 117.

24) *The Odd Women*, p. 336.

25) *Ibid*.

26) Selig, p. 72.

本稿は，日本英文学会第45回九州支部大会（1992年10月31日，鹿児島純心女子短期大学）における研究発表"George Gissing, *The Odd Women* (1893) の「現代性」——男女の間に横たわる溝——"に基づくものである。